

はじめに

関東甲信越地域一〇都県の研究者を中心に二〇一〇年七月に発足した「東国古代遺跡研究会」は、個別のテーマを掲げ各地の持ち回りで開催するテーマ研究大会と、一〇都県で行われた最新の調査事例を共有する事例研究大会を隔年で開催してきた。その一三回目は福島県、一四回目は国士舘大学を会場に、「東国の地域交流と平安仏教」という一貫したテーマのもとで行われた。

福島県を会場とした第一三回研究大会は、右に述べたテーマにもとづき、「南東北と北関東の里の寺、山の寺」を対象として、二〇二三年十一月十一・十二日の二日間にあつて開催された。これは当会の福島県の幹事である筆者が、荒木隆・菅原祥夫・河野真也子の諸氏と協議し、田中広明会長の指導助言のもとで企画したものである。

周知のとおり福島県会津地方は、平安時代に南都の高僧である徳一が教学研究と布教に情熱を注いだ地であり、国宝となっている勝常寺の薬師如来像や史跡・慧日寺跡など、徳一が残した文化財が数多く所在している。このため当地方の平安仏教に関わる遺跡は、古くから梅宮茂氏をはじめとする研究者が研究に取り組み、近年でも荒木・菅原両氏が精力的な研究を重ねている。加えて、最近では高寺山遺跡や堂後遺跡など関連遺跡の調査が進められて大きな成果を上げている。今日までに明らかにされた福島の仏教文化は、東国のなかでもひととき異彩を放っており、開催地

として相応しいテーマと言えよう。

通例にならない、福島大会は一日目をエクスカージョンとし、慧日寺跡や勝常寺薬師如来像など、会津地方にある徳一ゆかりの文化財の見学に加え、考古学から国分寺や村落寺院、山林寺院など多様な古代仏教遺跡について長年わたり研究に取り組まれている須田勉先生に、勝常寺の所在する湯川村を会場に基調講演をいただいた。二日目に郡山市を会場として行われた研究会では、福島県ならびに同県と境を接する北関東の茨城・栃木・群馬の三県における、このテーマに関わる最新の遺跡例や研究成果を持ち寄って発表をいただくとともに、総括として、文献史学から今日における古代仏教史研究を牽引されている藤本誠先生に特別講演をいただいた。福島県の会津地方と中通地方を股にかけ、二日にわたって行われた研究会は、関東甲信越地方に加えて、ひろく東北・北陸・関西地方からの参加がみられ、また考古学・文献史学だけでなく宗教学・民俗学など隣接分野の研究者の参加もあつて、地方開催の回としては白眉であつたと、企画者の一人として自負している。これを受けて、翌年度の二〇二五年二月八・九日に開催された第一四回研究大会は、このテーマで主に南関東（千葉・埼玉県等）の遺跡を取り上げることとなつた。改めて述べるまでもなく本テーマは、開発に伴う激しい発掘現場のなかで、平安仏教の在地社会における存在形態の解明に取り組まれた須田勉先生の研究の原点の一つである。須田先生が研究をスタートさせた千葉県の事例報告等々の成果を受けて、このテーマによる研究大会の意義は確固たるものとなつた。結果、本研究会において、二カ年にわたって同じテーマを扱った異例の企画となつたのである。

さて本書は、「平安仏教」をテーマに行われた二回の研究会で発表された論考を基本に、新たな論考を加えて再編集されたものである。本書の企画の背景について、僭越であるが簡単に触れておこう。一般に、研究の深化・精緻化に伴つて、専門分化が進むことは必然である。古代地方寺院遺跡の研究においては、類例の抽出・増加とともに、国

分寺・郡衙周辺寺院・豪族居宅内の寺院・山林寺院・村落寺院などを個別に取り上げた論考が増えた。しかし在地社会においては、これら各階層の寺院が相互に有機的な関係をもつて機能したことは想像に難くない。その関係の実態解明は、今後の研究において重要な課題となろう。そのためには、郡衙周辺寺院・村落寺院といった区分を一旦はずし、「平安仏教」という切り口のもとに、関連遺跡を横に並べてみることも一案と考えた。寺院間の関係を考古資料から実証することは必ずしも容易ではないが、文献史学の視角もお借りして学際的に研究を進めることで、解明の糸口が得られよう。当研究会がモデルとした古代城柵官衙遺跡検討会も、毎回の特集が古代史研究者も加わった学際的な研究であることを通例として、成果を積み重ねている。

また、「平安仏教」の所産として地域に残された文化財は、史跡や美術工芸といった種別ごとに取り扱われる場合が多いが、実際の現場において、それらは同じ地域、同じ土地、同じ場所に存在する。したがって、それらを文化財のジャンルを越えて一緒に考えてみたい。第一三回大会の開催に先立つ七月に、エクスカージョンの行程を組み立てるに当たって、前述した福島県関係者三氏とともに会津地方の文化財を訪ね歩いた際、その思いを強くした。この点は、地方開催において、現地でのエクスカージョン（参加者が現地での体験や議論を通じて知的な探求を行う小旅行のこと）を盛り込んだ当研究会ならではの取り組みから導かれた展望であった。

さて、当研究会における上述の取り組みの成果が、本書として結実したことは、筆者にとって望外のことである。加えて、考古学の成果を中心としながらも、文献史学・美術史学といった歴史諸科学の成果を収録できたこと、さらには、今日までに蓄積されてきた仏教関連遺跡の事例が、関係各位の協力のもとで集成・共有されたことは、極めて重要と考える。本書が日々、現場に立つ研究者・文化財担当者の活動の一助として活用されることを願ってやまない。これまで、当研究会の成果は、高志書院の「古代東国の考古学」と銘打った叢書として、順次刊行されてきた。こ

の度、本書はシリーズ名を「東国の古代」と刷新し、従前にはなかった学際性や、資料集成といった向後の研究へ向けた有用性を高めたかたちで刊行されることとなった。私事にわたるが、筆者は関東甲信越地域一〇都県を中心とする当研究会において、東北から唯一、福島県の幹事として参加させていただいている。関東甲信越と東北の研究者間の人的交流の活発化、両地域の古代社会における歴史研究の進展の契機となることを企図したが、研究会発足の趣意の一つであった。当研究会の東北での開催と本書の刊行に携わることによって、筆者に与えられた責務の一端を果たすことができ、幸甚の至りである。

末筆ながら、研究会でご発表いただいた方、本書にご寄稿いただいた方、資料集成に尽力いただいた方はもちろんのこと、研究会の企画立案や開催にご協力いただいた各県幹事の方や開催地の地元関係者の方々、事務局として連絡調整に対応いただいた国士舘大学考古学研究室の学生諸君、そして本書の企画や編集の労をお取りいただいた高志書院の濱久年氏に、厚く御礼を申し上げたい。

二〇二六年八月

東国古代遺跡研究会幹事

藤木 海